

# ジェンドリンの言語論にみるシンボル過程

## — 『プロセス・モデル』 第七章 A —

得丸 智子

### 要 旨

本稿は、ユージン・ジェンドリンの言語論を読み解くことを目的とし、その最初のステップとして、『プロセス・モデル』の第七章前半のA「シンボル過程」を紹介する。ここでは、言語の前提として、シンボルとは何か、極めて独創的な概念を駆使してモデル化されている。

【キーワード】 ユージン・ジェンドリン、 言語論、 シンボル、 ジェスチャー

### 1. 本書をめぐる状況と本書の概要

『プロセス・モデル (A Process Model)』<sup>1</sup>は、米国在住の哲学者で臨床心理家でもあるユージン・ジェンドリン (Eugene T. Gendlin) の主著の 1 つである。1997 年版がフォーカシング・インスティテュートから購入できる他、1992 刊行の旧版全文が、フォーカシング・インスティテュートのウェブ・ページで公開されている (<http://www.focusing.org>)。しかし、大部の著であり、内容が難解なため、十分に読解が進んでいない<sup>2</sup>。

近年、その独創的価値が注目され、2006 年 5 月には、オランダで「プロセス・モデル・カンファレンス」が開催された。2007 年 7 月にはイギリスのイーストアングリア大学で「プロセス・モデル・コロキウム」が開催される予定である。

『プロセス・モデル』は、8 つの章からなり、原始生物から動物、人間へと論を進め、世界のあり方や人類の未来の方向を示す壮大なものである。第七章「文化、シンボル、言語」で、言語について論じられている。

本稿では、規定ページ数の関係で『プロセス・モデル』第七章 A「シンボル過程」を紹介し、極めて独創的なジェンドリンの言語論を読み解く第一ステップとしたい。なお、本書は日本語に訳されていないため、本文の引用は筆者の訳によった。

### 2. 本書の中での第七章 A の位置づけ

『プロセス・モデル』の 282 ページの本文のうち、第七章「文化、シンボル、言語」は 94 ページを占

める。全体の 3 分の 1 がこの章に充てられているわけで、第七章で展開されている言語論が、ジェンドリン哲学の主要部分を構成することがわかる。

全体の中での第七章の位置づけを確認するために、第七章の冒頭と末尾を確認しておこう。

第七章 A の冒頭は「とうとう、私たちは、シンボル化を引き出す準備ができた」と始まり、これから扱う「シンボル化」が『プロセス・モデル』の中心テーマであることが述べられる。先立つ第 I - 第 VI 章では、このために、身体プロセスと行動を再定式化してきたのだという (p.122)。

第七章は、A「シンボル過程」と B「原始言語」の 2 節から成るが、A は p.122-162 の 41 ページ、B は p.163-215 の 53 ページで、ほぼ等分量を占める。この 2 節で、人間が言語を獲得していく過程がモデル化されていく。

第七章 B の末尾は、「語に頼っていると、その(状況の)多くを推進することに失敗するかもしれない。(中略)私たちは非常に深く推進することもまたできる。しかし、その全体を推進するのではない」(p.215)と結ばれ、状況を推進するという言語の達成と、状況全体を推進することはできないという言語の限界が述べられる。続く第八章では、全体を推進する媒介としての「状況全体についての身体感覚」へと、論旨が展開していく。

本稿で扱う第七章 A「シンボル過程」の到達地点を確認しておこう。末尾は「シンボル化するとき、人は、その状況の中に生きている」「私たちはまだ、人間が身体的に現在、身体的に現在そこに居ない状

況の中に生きることができるような段階に到達していない」(p.161)と結ばれる。言語獲得の中間段階として、人間がシンボルによって身体的に現在そこに居ない文脈を推進できる段階に達するまでのモデルが、VII章 A で提示されている。

### 3. 身体プロセスと行動の再定式化

最初に、本稿で紹介する先の議論のために、第Iー第VI章で身体プロセスと行動がどのように再定式化されているかを、最低限必要なポイントに絞ってまとめておきたい。

ジェンドリンは、身体と環境は1つの相互作用プロセスであるとする(身体 - 環境と表現される)。身体と環境は1つのプロセスであるから、互いに互いをインプライ(含意)する。身体プロセスは、身体 - 環境のプロセスである。

身体全体は、諸プロセスとして、協働的に分化されている。諸プロセスは、本来的に、あらゆるものがあらゆるものと関係し合うように(everything by everything)相互影響している。この様相はイブイブイング(eveving)という造語で表現される。

環境のある局面が失われて1つのプロセスが停止すると、生物が死なない限り、残りの諸プロセスが、停止したプロセスの続きをインプライし、そこから全体として次の生起がおこる。これを「インプライングの中へと生起する(Occuring into implying)」という。その結果、プロセス全体は、より複雑なあり方で再開する。諸プロセスの本来的な相互影響による再開は推進と呼ばれる。身体プロセスは、不断不変の循環プロセスである(第Iー第III章)。

しかし、大きな環境変化がおきると、循環プロセスが開かれ、身体プロセスは容易に再開されず、停止が続く。このとき、プロセスの迂回として、媒介となるイベント(Intervening Event)が起きる。行動はその一つである。

行動は、二重化された身体プロセスである。身体プロセスが停止すると、停止したプロセスの次のビット(小片)が繰り返されたまま続く(これをリーフィングという)。その衝撃により身体は変化し、身体 - 環境プロセスを通じて、環境を変化させ、さらに環境からの影響を受け変化するというふうが続いていく。身体は、それ自身を変化させ、その変化を通してそれ自身を進めていくのである。これが行動である。このとき身体は、行動文脈における身

体プロセスのありようを感じ、かつ、身体がたった今どうであったかを感じる。後者が知覚である(第IVー第VI章)。

### 4. 動物の“ジェスチャー”

第VII章 A で議論を始めるにあたって、ジェンドリンは、シンボル化について「現在使われているような貧弱な概念で考えることはできない」とし、「明確に考えられる概念を打ち立てるつもりである」(p.122)と宣言する。議論は、引用符付きの“ジェスチャー”から始められる。これは動物のジェスチャーを意味する。

2匹の猿が出会ったとき、一方が背中を見せるしぐさをすると、戦いの行動が回避されることが知られている。小さな行動(背中を見せる)が、大きな行動文脈の変化(戦いの回避)をもたらす。“ジェスチャー”は「そうである以上に“意味する”」点で、シンボルに非常に近い。しかし、動物の“ジェスチャー”は単なる行動であって、「ーについて」(aboutness)のレベルを構成しない(p.124)。

もしも2匹の猿が出会い、2匹の間に川があって、どちらも背中を向けないとしたら、どうなるだろうか。戦いの生起も、回避の生起も起こらずに、1頭の猿の“脅しのジェスチャー”が、もう一方に身体的シフト(変化)をもたらす(戦いの準備のために手を振り上げるなど)。その猿の身体的 - 見えが、また最初の猿の身体にシフトをもたらし、順番に影響が続いていく(p.125)。この時、身体的 - 見えは、その行動文脈にいること(being in)のシンボルである(p.126)。ここでは行動文脈は休止しており、次の行動シークエンスの最初のビット(戦いのシークエンスの最初の手を振り上げるしぐさ)が、わずかに異なって繰り返される(これをバージョンングという)(p.124)。同一の“ジェスチャー”のわずかに異なったバージョンのシークエンスはダンスと定義され、行動文脈が休止するとき、迂回としてダンスが生起するとモデル化される(p.125)。

新しいシークエンス(ジェスチャー・シークエンス、ダンス)は二重化されている。それは、行動文脈における行動であり、かつ、行動文脈「について」の表現である(p.128)。

ジェスチャーやダンスは、行動としては、腕や足を上げたり、筋肉を隆起させたりする単純な動きである。通常の行動と同様に、環境(開かれた循環)

のフィードバックを要求する。たとえば、ダンスの最中でも、崖があれば止まるし、岩があればよけて回り込む (p.128-129)。

一方、ダンスは、行動文脈「について」(about)の表現である。それは、その行動文脈にいるときの身体的変化であり、身体の中で進行する(身体に感じられ、持たれ、連続される) (p.129)。

腕や足を上げるというような行動としての単純な動きは、行動空間で進行する。行動空間は、行動シークエンスで満たされた複雑な空間である。一方、表現としての単純な動きは、別の空間で進行する。それは、身体的 - 見えの空間、ジェスチャー空間、単純な動きの空間であり、空虚な空間である。この空間では、行動文脈は変化せず“同一”として保たれ、わずかに異なって繰り返される(バージョン化される)。行動文脈は、表現され、持たれ、感じられ、連続される。この空間は、行動の空間であるが、シンボル化された動きの空間であるから、シンボル空間であるといえる (p.129)。

ジェスチャー・シークエンスは、2つの空間の両方で生起する。行動空間は、単純な動きによって変えられる。背中を向けることは戦いの回避に関係し、人間がミーティングで腕を上げることは投票に関係し、書類に署名することは状況全体の変化に関係する。しかし、猿は行動空間で背中を向けるにすぎない。人間が、それを単純な動きの空間(シンボル空間)で観察するのである (p.130)。人間は、動物の中に存在するが、彼らの中では機能を持たないものを、新しい種類の表現として取り出す能力を持つ。人間は、美しい氷の結晶のパターンによって推進されるが、氷はそうでないのと同様である (p.131)。

行動文脈において身体がどのようなものであるかは、身体的 - 見え、聞こえ、動きによって表現される。行動文脈における身体と身体的 - 見えの間には、本来的な結びつきがある。所与の種(specie)にとって、身体は、所与の行動空間でそれがそうであるべく、見えたり聞こえたりする。それらは、誰かによって決められたシステムではない (p.131)。

## 5. 自己 - 意識

人間にとってのジェスチャーは、ほんとうの意味でのジェスチャーである。動物のそれは“ジェスチャー”と引用符つきで区別されていた。ジェスチャー・シークエンスは、シンボル化でもあり、行動

- 空間のバージョン化でもある。ジェスチャー・シークエンスにおいて、人間は、感じたり、知覚したりしたものの感じや知覚を持つ。言い換えれば、自分自身の行動文脈におけるありよう(being)に対する感じや知覚、つまり「自己 - 意識」を持つ。

ここで重要なのは、この「感じ」が、シークエンスのシンボル化の結果としてあらわれる“同一の行動文脈”についてのものであることである。バージョン化する行動文脈でわずかに変化する身体の感じの連続の中で、時間の広がりを超えて1つのビット(小片)になり得るものだけが、“同一”として“跳び出て”くる(fall out)とモデル化される。そして、これがパターンであると定義される (p.133)。パターン・シークエンスは、身体がその行動文脈の中でどのように見えるかのシンボルである。

パターンは、自己 - 意識のプロセスを推進する。パターンは、何か「について」(about)であることを除いては、私たちの上にインパクトを持ち得ない。パターンは、二重の方法(このパターンで、そして、何かのバージョン化として、の両方)で私たちを推進する。私たちはそれによって、何か「について」(about)感じていると感じ、自分が感じていると感じる。自己 - 意識は、自己についての意識ではない。統一体や、他の実体から切り離された一つの実体であるような自己があるのではない。自己 - 意識や自己の感覚があるのである (p.134)。

人間は、身体的 - 見え(聞こえ、単純な動き)から、パターンを取り出すことができる(パターンに応答する)能力を持つから、対象が無生物であってもパターンを取り出すことができる。人間が「像」に反応することができるのも、パターンを取り出せるからである (p.135)。人間にとっての対象は、行動文脈における行動の対象(動物におけるように)であると同時に、見えや聞こえのパターンを持つものである。このように二重化されている人間にとっての対象を、ジェンドリンはシーンと呼ぶ。また、二重化されている人間の行動をアクションと呼ぶ。アクションには、自己 - 意識が暗在している。アクションは時々停止させられ、そのときはつきりと自己 - 意識される (p.138)。ジェンドリンは、シーンやパターンは、一種の普遍性であるという。ただし、一般に言われているような普遍性ではない。普遍性の再定義は、『プロセス・モデル』全体の中でも重要な意味をもつ。

### 6. 3つの普遍性

ジェンドリンによれば、“普遍性”は、多くの“実例”に適用することができる何かである。プラトン以来の哲学の歴史は、普遍性に関する多数の議論を持つが、ジェンドリンによると、これまで議論されている普遍性は“第3”の普遍性である。先立つ“第1”“第2”の普遍性を理解しなければならないという(p.141)。

“第1”の普遍性は、普遍性として起きる(happen)ことはない。単に、暗在的にのみ機能する。したがって、これを直接、見たり感じたりすることはできない。新しい身体的 - 見えのバージョンや新しいダンスが、第1の普遍性(第1のシークエンス)であるが、それが暗在的に機能するとき“第2のシークエンス”がクラスター全体として形づくられ、それに伴って新しいジェスチャー(シンボル)の全領域が作られる。これは“根源的適用”と呼ばれ、対象やジェスチャーのパターンは、“第1の普遍性”の根源的適用の実例であるとモデル化される。先に見たように、人間は、繰り返し起きることの中で同一のものを、パターンとして取り出す能力を持っている。しかし、この段階では、その能力は、まだ、“第3”の普遍性のように異なる実例の中で類似性を連続させることには、用いられない(p.142-146)。それについては第VII章Bで詳しく論じられる。

### 7. 道具の制作とイメージ

道具の制作は、人間と動物を分かちものであるといわれる。ジェンドリンは、自身のプロセス・モデルで、その説明を試みている。

ミツバチやクモも巣を作る。しかし、人間は、パターンを再アレンジすることによって物を作る。パターンは、行動 - 対象が形成することができないシークエンスを、形成することができる。一旦、パターンを推進する対象がアクションの一部になると、たとえば、バナナを採るための棒(行動 - 対象)が短すぎるときに、十分に長い棒が焦点的にインブライ(含意)されるようになる。焦点的にインブライされたパターンは、人間が知覚するどんなものの中でも機能する。人は、木を見上げ、求めている棒をそこに見て、余分な葉を引きちぎることができる(p.150)。

パターンを持つことは、イメージをもつことでも

ある。人間は、あたかも手の中に棒を持っているかのように動くことや、手を伸ばして棒の形をインブライすることによって、棒をジェスチャーすることができる。パターンは、決して、実際にはないが、身体的に独立して存在するかのようなのである。シーン(人間にとっての対象)は、本質的に、この感覚におけるイメージである(p.150)。

道具の制作は、休止し(バージョニングし)つつあるアクションであるともいえる。棒を作っている間、バナナは得られない。制作の間、人は、休止する(バージョニングする)アクション文脈を(“第2”のシークエンスとして)感じて(持って、連続して)いる。そうしなければ、なぜ、棒が必要であったのか、わからなくなってしまう(p.150)。

しかし、第VII章Aの段階では、バナナが得られた後は、棒はその意味を失う。実際に、何百万年もの間、人間は狩りの道具を作り、それを、狩りの後、狩りの場所に放置していたのである(p.150)。

### 8. メッシュ化、暗在的に機能すること他

普遍性をめぐる議論で、“第1”の普遍性は、暗在的にのみ機能するとされていた。暗在的に機能するとはどういうことであろうか。それは、誰かが、固定された切片を暗いところから明るいところへ移すことではないし、ただ単に隠されているものを展開するのでも、まだ展開されていないのでもない(p.157)。

ジェンドリンのモデルでは、文脈は、互いに暗在するシークエンスのメッシュ(網目)である。シークエンスのメッシュは、古いものの上に新しいものがピラミッド化され、層状になっているとモデル化される。シークエンスは、メッシュの中で暗在的に機能していても、なお、それ自身として再び起きることができる。ここでのポイントは、古いものによっていながらそのつど新しいシークエンスの形成をモデル化することである(p.151-152)。(第VII章Bで、言語はレパートリーの中のシークエンスを“使用”する)。

シークエンスは、身体プロセスのイブイブイングのつながりであるから、すべてのシークエンスにすべてのシークエンスが暗在している。つまり、1つの中にすべてが暗在し、別の1つにもすべてが暗在する。となると、1つが暗在的に機能すると、すべてが一度に暗在的に機能することになってしまう。

しかし実際は、そうはならない。暗在しているが機能していないシークエンスがあるからである。より正確にいうと、暗在的に機能するシークエンスが、暗在的に機能していない状態がある。このとき、そのシークエンスは「ヘルド (held)」であると定義される。

このようなメッシュ化について、イブイブイングの複数形 (evevings) を用いた説明もなされている。暗在する諸シークエンスのメッシュの中には、異なった複数のイブイブイングがあり、諸シークエンスは、異なったイブイブイングの中で暗在的に機能するとき、同じにはならない (p.155)。1つのシークエンスは、“一と一”の両方になりうるようにメッシュ化されているとモデル化されている。

このモデルでは、何かが展開 (explicit) するときには、生起したものが暗在していた時にそうであった以上の、あるいは異なる部分が展開し (展開の第1法則) (p.154)、以前は暗在していなかった他のもの (ヘルドされていたものや全く新しいもの) が暗在的に機能するようになる (展開の第2法則) (p.157)。

また、シークエンスは、生起するシークエンスを形づくること (shaping) に参加する限りにおいて、暗在的に機能する。暗在的に機能するシークエンスは、生起しているシークエンスを変化させ、自らも変化させられる (間接的に推進される)。ヘルドされたシークエンスは、参加もしないし、変化も被らない (p.159)。

どのシークエンスがどのように暗在的に機能するかを正確に決定するのは、「このシークエンス」として諸身体プロセスをイブイブイングし、今、生起しているシークエンスである。そして、そのシークエンスの生起を作るのは、諸身体プロセスのイブイブイングである。身体はシークエンスをインプライし、生み出しもするのである (p.156-157)。

諸シークエンスが、生起したり、暗在的に機能したり、ヘルドされたりしつつ1つの文脈となることを表現する語として、“再構成”が用いられる。生起するシークエンスは、文脈を“再構成”し、全体として持つ (感じる、連続する) ことを可能にする。“再構成”された文脈は、シークエンスから“跳び出てくる (fall out)”。たとえば、猫が鳥を追いかけるとき、猫は鳥を、しっかり固定するように保って走る (生起している) が、風が通り過ぎることもま

た生起している (暗在的に機能している)。

シークエンスが暗在的に機能する限り、「インプライングすることと生起することは一緒になった現実的な1つの出来事」(Implying and occurring are one real event, together.)である。“暗在的に”機能するものは何でも、生起しつつあるイベントの重要な現実の局面なのである (p.158)。

生起しつつあるシークエンスは、可能性としての他のシークエンスを変化させる。身体的な諸イブイブイングだけでなく、暗在する (開かれた循環の) 環境と、それがどのように推進されるのかのインプライングをも変化させる。シークエンスが“再構成”するとき、行動空間 (アクション空間) 全体は、直接的に推進され、暗在する行動可能性は間接的に推進される。行動空間も行動可能性も、どちらも変化させられる (p.161)。

シンボル・シークエンスではどうであろうか。シンボル・シークエンスは、行動文脈の休止と、バージョンングする行動文脈を“同一”に保つパターン・シークエンスに、二重化されていた。二重化されたシンボル・シークエンスは、その行動文脈での身体のありようを再構成する。二重化されたビットのそれぞれは、行動文脈の1つのバージョンなのである。それゆえに、シンボル・シークエンスにおいて、行動文脈は暗在しているのではなく、生起しているといえる。行動文脈は、シンボル化によって再構成され (持たれ、感じられ、連続される)。人は、行動文脈をシンボル化するとき、その状況 (行動文脈) の中に生きているのである (p.161)。

人間は、シンボル化された状況の中に生きることができる。だから、休止している狩りの文脈を生き、狩りの道具を作ることができた。しかし、道具は、狩りが終わったら、その場に放置された。ここまでの議論では、人間は、まだ、身体的に現在そこに居ない状況の中に生きる段階には、到達していない。その段階とは、身体的に、現在そこに居ない状況を再構成するジェスチャーを思いつく段階でもある。そこに達するとき、人は、狩りの道具を放置しなくなるだろう。身体的に現在そこに居る「家に帰る」文脈だけでなく、身体的に現在そこに居ない「次の狩りを生きる」ことができるからである (p.162)。そこには言語が介在してくる。その議論は、第七章Bに引き継がれる。

注

1. Gendlin,E.T. (1997) *A Process Model* , New York : The Focusing Institute.
2. ネットで公開されている旧版は、新版と若干異なっ

ている部分がある。本稿の引用は新版によっている。該当ページを（ ）の中に示した。また、本文中の引用符（”“）も、新版に基づいて付した。

とくまる さとこ／日本女子体育大学 体育学部  
tokumarusatoko@yahoo.co.jp